

多治見市文化財保護センター収蔵品展 ～美濃焼を支えた道具たち～

平成20年7月25日（金）～10月1日（水）
セラミックパークMINO ギャラリーウォーク



江戸時代的美濃焼は、日用雑器として江戸を始め東日本に広く流通していたものの、窯株制度や仲買株制度の下で陶器の自由な生産・販売は制限されていた。明治維新を迎え、陶器の生産・販売は自由化され、同時に、西欧諸国から石膏型や石炭窯などの新しい技術がもたらされるようになる。美濃の生産者や商人は、より効率よく、よりよい陶磁器を生産し、国内や世界へ美濃焼を広めるため、新しい技術を積極的に導入していった。先人達の努力の
1 うえに、今の美濃焼がある。

陶磁器の製造工程

製土→成形→乾燥→(素焼き)→下絵付(加飾)→施釉→本焼成→上絵付(加飾)



成形 明治時代までの美濃は、手口口成形が主流だったが、大正時代にモーターの動力で回転させる機械口口（ドウリョク）が導入され、技術の容易
2 さから昭和に入ると成形の主流になっていく。また、

慶応3年（1867）に日本にもたらされた石膏型は、昭和に入ると需要が高まり、陶磁器型材専用の焼石膏工場が作られる。石膏型や機械口口の導入により、陶磁器の生産量は飛躍的に増加した。



3

展示資料

機械口口（ドウリョク）、石膏型（ドウリョク使用型）、石膏型（ガバ鋳込み用）、土型

写真 1. 多治見市平野町にあった石炭窯 2. 機械口口（ドウリョク）のハンドル
3. 機械口口（ドウリョク） 4. 流し込み鋳込み（ガバイコミ）

4



5



加飾

明治時代、美濃には加藤五輔ら名工が現れ、精緻な絵付を施した染付磁器などが欧米へ輸出されるようになる。それと同時に、ヨーロッパから上絵具（洋絵具）や安価なコバルトが輸入され、摺絵や銅版転写といった量
6 産の絵付技法も盛んになる。輸入コバルトを用いた染付銅版転写の磁器製品は、日用食器として国内に広く流通し、美濃焼普及の一役を担った。

展示資料

コロクロ、筆、乳棒、乳鉢、ゴム判、石膏印、銅版、銅版転写紙、赤絵銅版受皿、染付銅版鉢、ラスター彩受皿



7

写真 5. 下絵付・呉須を濃む 6. コロクロ（絵付用の小さい口口） 7. 赤絵銅版受皿



流 通 明治33年(1900)に中央線多治見一名古屋間、
同44年(1911)に全線が開通すると、多治見は美濃焼の集
散地として大きく発展する。本町(現・多治見市本町)界
限に店をかまえた多治見商人(陶器商)は、陶器を詰めた
見本カバンを手に汽車で全国各地を旅し、果ては北海道の小さな町まで、卸
売商や小売店をくまなく廻り、美濃焼を売り歩いた。美濃焼の国内市場拡大
は、この多治見商人の活躍によるところが大きかった。



展示資料

見本カバン、駅出送状、鉄道図、ワラで荷作りした製品

写真 8. 陶器商の見本カバン

9. 多治見駅で出荷を待つ陶器

※写真 1・4・9 は多治見市図書館郷土資料室提供

文化財保護センターの企画展もご覧下さい。

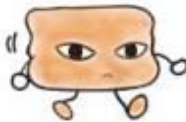
多治見の無形文化財展 うけつぐ つくる つたえる

平成 20 年 7 月 22 日 (火) ~ 12 月 25 日 (木)



荒川豊蔵作「志野花入」
(多治見市所蔵)

荒川豊蔵・加藤卓男・鈴木蔵など、
国・県・市無形文化財の陶芸家
13 人の作品を、子どもにもわか
りやすい解説で展示します。



開館時間：午前 9 時～午後 5 時

入館料：無料

休館日：土・日・祝日

場 所：多治見市文化財保護センター展示室

主 催：多治見市教育委員会

夏休み子ども講座

「高田・小名田を歩いて、
無形文化財の陶芸家を訪ねよう！」

多治見市無形文化財・青山禮三さんを
訪ねます。染付体験あり。(受講料無料)

日 時：8 月 9 日 (土) 9:00 ~ 11:30

集 合：小名田公会堂前

定 員：15 名 (小・中学生対象)

申し込み：多治見市文化財保護センターに
電話または F A X で

多治見市文化財保護センター

〒507-0071

多治見市旭ヶ丘 10-6-26

TEL (0572)25-8633

FAX (0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>



エンゴロさん

日本で一番
暑い多治見

